藤村全集

第十二卷

筑摩書房版

藤村全集第十二卷

昭和四十一年十月十日發行

著者　島崎藤村

發行者　竹之內靜雄

發行所　株式會社　筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話　東京(四)一七六五一(代表)

振替口座　東京四一二三番

第十二巻　目次

夜明け前　第二部

上巻……三
下巻……二五七
解題……五三九
校異……五五五
語註……五七九

夜明け前

第二部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上

卷

第一章

一

圓山應擧が長崎の港を描いた頃の南蠻船、もしくは和蘭船なるものは、風の力によつて遠洋を渡つて來る三本マストの帆船であつたらしい。それは港の出入りに曳き船を使ふやうな舊式な貿易船であつた。それでも一度それらの南蠻船が長崎の沖合に姿を現はした場合には、急を報ずる合圖の烽火が岬の空に立ち登り、海岸にある番所々々は俄かに動搖めき立ち、あるひは奉行所へ、あるひは代官所へと、各方面に向ふ急使の役人は矢のやうに飛ぶほどの大騷ぎをしたものであつたといふ。

試みに、十八片からの帆の數を持つ貿易船を想像して見るがいゝ。その船の長さ二十七八間、その幅八九間、その深さ六七間、それに海賊その他に備へるための鐵砲二十挺程と想像して見るがいゝ。これが弘化年度あたりに渡來した南蠻船だ。應擧は、紅白の旗を飜した出島の蘭館を前景に、港の空にあらはれた入道雲を遠景にして、それらの和蘭船を描いてゐる。それには、ちやうど入港する異國船が舳先に二本の綱をつけ、十艘ばかりの和船にそれを曳かせてゐるばかりでなく、本船、曳き船、共に一ぱいに帆を張つた光景が、畫家の筆によつて捉へられてゐる。

嘉永年代以後に渡來した黑船は、最早こんな舊式なものではなかつた。當時のそれには汽船としても所謂外輪型

なるものがあり、航海中は風を便りに運轉せねばならないものが多く、新舊の時代はまだそれほど入れ混つてゐたが、でも港の出入りに曳き船を用ふるやうな黑船は最早その跡を絕つた。

極東への道をあけるために進んで來たこの黑船の力は、すでに長崎、横濱、函館の三港を開かせたばかりでなく、更に兵庫の港と、全國商業の中心地とも言ふべき大坂の都市をも開かせることになつた。實に兵庫の開港は亞米利加(アメリカ)使節ペリイがこの國に渡來した當時からの懸案であり、德川幕府が將軍の辭職を賭けてまで朝廷と爭つて來た問題である。こんな黑船が海の外から乘せて來たのは、一體どんな人達か。こゝですこしそれらの人達のことを振り返つて見る必要がある。

二

紅毛とも言はれ、毛唐人とも言はれた彼等は、この日本の島國に對してさう無智なものばかりではなかつた。ケンペルの旅行記をあけて見たほどのものは、すでに十七世紀の末の昔にこの國に渡つて來て、醫學と自然科學との知識をもつてゐて、當時に於ける日本の自然と社會とを觀察した和蘭(オランダ)人のあることを知る。この蘭醫は二ケ年ほど日本に滯在し、和蘭使節フウテンハイムの一行に隨つて長崎から江戸へ往復したこともある人で、小倉、兵庫、大坂、京都、それから江戸なぞのそれまで歐羅巴(ヨーロッパ)にもよく知られてゐなかつた內地の事情を後から來るものゝために書き殘した。この和蘭人が兵庫の港といふものを早く紹介した。その書き殘したものによると、兵庫は攝津の國にあつて、明石から五里である、この港は南方に廣い砂の堤防がある、須磨の山から東方に當つて海上に突出してゐる、これは自然のものではなくて平家一門の首領が良港を作らうとして造つたものだと言つてある。おそらくこの

工事に費されたる勞力及び費用は莫大なものであらう、工事中海波のために二回までも破壞され、日本の一勇士が身を海中に投じて海神の怒を鎭めたために、辛うじてこれを竣工することが出來たとの傳說も殘つてゐると言つてある。この兵庫は下の關から大坂に至る間の最後の良港であつて、使節フウテンハイムの一行が到着した時は三百艘以上の船が碇泊してゐるのを見た、兵庫市には城はない、その大さは長崎ぐらゐはあらう、海濱の人家は茅屋のみであるが、奥の方に當つてやゝ大きなのがあるとも言つてある。

こんな先着の案內者がある。しかし、それらの初期の渡來者がいかに身を屈して、この國の政治、宗教、風俗、人情、物產なぞを知るに努めたかは、ケンペルのやうな和蘭人のありのまゝな旅行記が何よりの證據だ。彼の眼に映つた日本人は義烈で勇猛な性質がある。多くの人に知られないやうな神佛の如きをも尙且つ輕んずることをしない。しかも一度それを信奉した上は、頑としてその誓ひを變へないほどの高慢さだ。もしそれこの高慢と鬪爭を好むの性癖を除いたら、則ち溫和怜悧で、好奇心に富んでゐることもその比を見ない。日本人は衷心に於いては外國との通商交易を望み、中にも歐羅巴の學術工藝を習得したいと欲してゐるが、たゞ自分等を商賈に過ぎないとし、最下等の人民として輕んじてゐるのである。おそらくこれは嫉妬と不信とに基くことであらうから、この際友誼を結んで百事を聞き知らうとするには、先づその心を收攬するがいゝ。貨幣の類などは惜まず握らせ、この國のものを欺し、この國のものを尊重し、それと親通するのが第一である。ケンペルはさう考へて、自分に接近する人達に藥劑の事や星學なぞを敎授し、且つ洋酒を與へ、漸くのことで日本人の心を籠絡して、それからは頗る自由に自分の望むところを尋ね、曾て世界の祕密とされたこの島國に隱された事をも遺憾なく知ることが出來たと言つてある。

遠く極東へとこゝろざして來た初期の和蘭人の旅に就いて、ケンペルはまた種々な話を書き殘した。使節フウテ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ンハイムの一行が最初に江戸へ到着した時のことだ。彼等は時の五代將軍綱吉が住むといふ大城に導かれた。百人番といふところがあつて、そこが將軍居城の護衛兵の大屯所になつてゐた。一行は命令によつてその番所で待つた。城内の大官會議が終り次第、一行の將軍謁見が行はれる筈であつた。二人の侍が彼等異國の珍客に煙草や茶をすゝめて慇懃に接待し、やがて他の諸役人も來て一行に挨拶した。そこに待つこと三十分ばかり。その間に、老中初め諸大官が、あるひは徒歩、あるひは乘物の輿で、次第に城内へと集まつて來た。彼等はそこから二つの門と一つの方形な廣場を通つて奥へと導かれる。第一の門からそこまでは數個の階段がある。門と大玄關との間は甚だ狹くてほんの僅かの間隔に過ぎなかつたが、護衛の侍を初め多くの諸役人が群れ集まつて來てゐた。それから一行は進んで二つの階段を昇り、先づ入つたのは廣い一間で、それから右側の一室に入つた。そこは將軍に向つても、また老中に向つてもすべて對面を求めるものゝ許可を得るまで待ち合す所である。そこはなか〳〵大きな室であるが、周圍の襖をしめきると頗る薄暗い。僅かに隣室の上部の欄間から光線が洩れ入るに過ぎない。しかし國風によつて施された裝飾の美は眼もさめるばかりで、壁と言はず、襖と言はず、構造は實に念の入つたものであつたといふ。待つこと一時間以上、その間に將軍は謁見室に出御がある。一行のうちの使節のみが導かれて御前に出る時、一同大聲で、

「オランダ、カピタン。」

と呼んだ。これは將軍に近づいて使節に禮をさせるための合圖である。將軍が國内の他の最も强大な諸侯に對する場合でも、その態度は頗る尊大である。すべて諸侯の謁見に際しても、その名が一度呼び上げられると、諸侯は無言で坐つたまゝ手と膝とで將軍の前ににじりより、前額を床にすりつけて拜禮した上で、又同一の態度で後へ這ひさがるのである。そこで和蘭の使節も同じやうに、將軍へ獻上する進物を前に置き、將軍に對して坐し、額を床につけ、一言を發することもなく、あたかも蟹のやうにそのまゝ後へ引きさがつた。

和蘭人がこの强大な君主に對する謁見はこんな卑下したものであつた。これほど身を屈して、禮儀を失ふまいとしたのは言ふまでもなく、この國との通商を求めるためであつたからで。隨行のケンペルも許されて室を參觀することが出來た時に、彼は素早く床に敷かれてゐる疊の數を百と數へ、その疊がすべて皆同一の大きさであることを看て取り、襖、窓なぞも細かにそれを視察した。室の一面は小さな庭で、それと反對な側は他の二室に連なり、二室共に同一の庭に向つて開くやうになつてゐるが、その二室の小さな方に將軍の御座がある。彼はその眼で、將軍の風貌をも熟視しようとしたが、それは甚だ難いことであつた。といふのは、光線が十分に將軍の御座の所まで達しないのと、謁見の時間が短くて、且つ謁見者があまりに禮を低くするため、頭を上げて將軍を見る機會がないからであつた。のみならず老中はじめ諸大官が威儀正しくそこに居竝ぶから、客も周圍の嚴さに自然と氣を呑まれるからで。

しかし、當時の和蘭使節が一行の自卑はこの程度にのみとゞまらなかつた。ずつと以前には使節が將軍のために行ふことは謁見だけで終を告げたものであるが、いつの間にか妙な習慣が出來て、使節謁見ずみの後、一行はそのまゝ退出することを許されない。更に導かれて、大奥の貴婦人達に異人のさまを見參に入れるといふ習になつてゐた。そこでケンペルも蘭醫として、他の二人の隨行員と共に呼び出され、使節の後に隨いて、更に御殿の奥深く導かれて行つた。そこには數室から成る大廣間がある。ある室は十五疊を敷き、ある室は十八疊敷である。その疊にもまたそこへ坐る人によつて高下の格のさだまりがある。中央の部分には疊がなく、漆をはいた廊下になつてゐて、そこに和蘭人等が坐れと命ぜられた。將軍と貴婦人達とは彼等の右手にある簾の後にゐた。一と通りの挨拶が終つた後、莊嚴な御殿は忽ち滑稽の場所と變つた。一行は無數の馬鹿らしくくだらない質問の矢面に立たせられた。例へば歐羅巴に於ける最新の長命術は何かの類だ。その時將軍は彼等和蘭人から遙かに隔つて貴婦人等の間にゐたが、次第に彼等に近づいて來、出來るだけ彼等に接近して、簾の後方に坐しながら、侍臣のものに命じて彼等の禮服な

るカツパを取り去らせ、起立して全身を見得るやうにさせろとあつたから、彼等は言はれるまゝにした。更に歩め、止まれ、御辭儀をして見よ、舞踏せよ、醉漢の態をせよ、日本語で話せ、和蘭語で話せ、それから歌へなどの命令だ。彼等はそれに從つたが、舞踏の時にケンペルは舞につれて高地獨逸語で戀歌を歌つた。

實際、和蘭使節の隨行員はこれほどの道化役をつとめたものであつた。しかし彼ケンペルはそこに舞踏を演じつつある間にも、江戸城大奥の内部を細かに視察することを忘れなかつた。彼は簾の隙間を通して二度も將軍の御臺所を見ることが出來た。彼女は美しい黑い眼をもち、顏の色が蔦色に見える美人で、その髪の形はひどく大きかつたといふ。彼女はさだめし背の高い人で、年の頃三十五六であらうと思はれたといふ。簾は葦で織られた掛物で、その背面には美しい透明の絹布を掛けたものである。その一方は裝飾のため、一方にはまた後方の人物を匿すために、簾には彩色でいろ〳〵なものが描いてある。將軍自らは薄暗いところにその位置を占めたから、思はず洩らす低い聲がなかつたら、ケンペルなぞはそこに人があるとは知らなかつたらうといふ。ちやうど彼等の前面に當つて他の簾の後には位の高い人達や諸貴女が集まつてゐた。葦の簾の間にはところ〴〵に紙の片を結びつけて隙間を大きくしたのがケンペルの眼についた。彼はひそかにその紙の片を勘定して見たところ、三十ばかりあつたから、簾の後には同數の人物がゐたらうとも想像したといふ。

和蘭人等の演戲は約二時間も續いた。彼等は將軍はじめ滿廷の慰みのために種々な藝を演じたが、さすがに使節ばかりはその仲間には加はらなかつた。フウテンハイムは犯しがたい威風を具へた重々しい容貌の人だつた。日本人の目にもこの一國の代表者にまでそんな滑稽な眞似を演じさせるのは非禮であると見えたものであらう、とケンペルは書き殘してゐる。

その翌年、西暦千六百九十二年（元祿五年）に、今一度和蘭使節は江戸へ參府することになつた。そこでケンペルもまたその一行に加はつて內地を旅する再度の機會を捉へた。一行は三月はじめに長崎の出島を出發し、船で兵庫に着いて、大坂奉行をも京都所司代をも訪ねた。この再度の內地の旅は日本の自然や社會を觀察する上に一層の便宜をケンペルに與へたのである。大坂奉行の屋敷では、ケンペルはその奉行から十年來の宿痾に惱まされて未だに全快しないでゐる家人のあることを告げられ、どうしたらそれを治療することが出來ようかと尋ねられた。兎も角も彼は診斷することを望んだところ、奉行がそれを遮つて、病は身體の中の祕密な場所に屬するからと言つて、精しくその症狀を告げ、それによつて宜しく判斷し、施藥せられたいとのことであつた。そこで彼は求められる通りにしてやつたこともある。その大坂奉行は彼等が異國の風俗をめづらしがり、帽子を手に取つて打ちかへし眺めるやら、上衣を脫がせて見るやらして、橫文字を書け、繪を描け、歌を歌へと所望した上に、なほ進んでは舞踏することや歐羅巴風な風俗習慣のいろ〳〵を實演することまで求めたが、一行のものは、それを拒んだ。彼等が京都所司代を訪ねた時は又、一つの晴雨計を取り出して來る日本人があつて、その性質、使用法なぞを尋ねられたこともある。その晴雨計は、彼等がそこに到着した頃から數へると、實に約三十年も前に、和蘭人の贈つたものであつた。

四月下旬のはじめには、一行は遠く旅して行つた江戸表にもう一度彼等自身を見出した。折惡しく雨の多い頃で、外出も困難ではあつたが、彼等は行裝を整へて町を出、江戸城の關門を通り過ぎて第三の城廓に入り、そこで將軍謁見の時の來るのを待ち合せた。その間、彼等は雨に濕つた靴や靴足袋を捨てゝ新しいものに換へ、それから謁見室へと導かれた。痩せて背は高く、面長で、容貌の凜々しいことは獨逸人に似、起居振舞は遲緩ではあるが、また極めて文雅な感じのある年老いた人がそこに彼等を待ち受けてゐたといふ。その人が當時肩を比べるものゝない威權の高い老中だつた。彼等和蘭人にはすでに前年の馴染のある正直謹嚴な牧野備後だ。

和蘭人からの進物を將軍に取り次ぐことも、あるひは將軍の言葉を彼等に取り次ぐことも、それらはみなこの牧野老中がした。例の謁見の儀式が濟んだ後、一行はしばらく休息の時を與へられ、長崎奉行の厚意により今一度よく室を參觀することをも許された。異人どもに眺めを自由にさせよとの心づかひからか、庭園に向つた障子も開け放してある。彼等は膝を折り曲げて坐ることの窮屈さから免れるため、そこの廊下をあちこち歩いてゐると、近づいて來て彼等に挨拶し、異國のことをいろ〳〵と質問する幾人かの貴人もあつた。

やがてまた大奥の廣間へと呼び出される時が來た。深い簾のかげには殿中の人達が集まつて來てゐた。將軍と二人の貴婦人も一行のものゝ右手にあたる簾の後にゐた。その時、彼等の正面に來て坐つたのも牧野備後だつた。一同の拜禮が型のやうに終つた後、備後は將軍の名で彼等に挨拶し、さていろ〳〵なことを演ずるやうにとの註文を出した。年老いた大通詞をしてその意味を彼等に告げさせた。眞直に坐つて見よ。上衣を脱いで見よ。姓名、年齡を語れ。立て。歩め。轉げ廻れ。踊れ。歌へ。互に御辭儀をして見せよ。怒つて見せよ。食事に客を招く眞似をせよ。互に言葉のやりとりをせよ。父と子の親しい態をせよ。二人の親友または夫婦が相禮し、又は別るゝ態をせよ。小兒と遊び戯れよ。小兒を腕の上にのせ、又はそれに似寄つたことをして見せよの類だ。のみならず、彼等は例によつて滑稽な、しかも眞面目な質問の矢面に立たせられた。例へば、彼等の住居はどんな家であるか。彼等の習慣はどう日本人のと異なるか。彼等の死者を葬る場所は何處で、その時は何日であるか。彼等もホルトガル人同樣の祈りをし、偶像をも持つてゐるか。和蘭その他の異國にも日本のやうに地震があり、雷があり、火事があるか。又は落雷のために觸れて死ぬものがあるかの類である。

いつの間にかケンペルは道化役者としての彼自身をこの莊嚴な殿中に見つけた。彼は同行の和蘭人と共に、帽子を冠ること、話しながら室内を歩くこと、又彼等が十七世紀風の鬘を脱いで見せることなぞを命ぜられた。彼はその間、しば〳〵將軍の御臺所を見る機會をも得たといふ。將軍も日本語で、和蘭人は自分の居る室を殊に鋭く見つ

つある旨言はれたものゝやうで、彼等は將軍がそのもとの座をすてゝ彼等の正面にあつた貴婦人の所に移つたのを見てそれを推測した。彼等は次に、今一度鬘を脱ぐことを命ぜられ、續いて一同は飛び上ること、踊ること、泥醉漢の態をすること、連立つて歩行するさまなどを實演させられた。日本人は又、使節とケンペルとに備後の年齢は幾歳ぐらゐに見えるかと尋ねるから、使節は五十と答へ、ケンペルは四十五と答へた。聞くところによると、この老中筆頭の大官はすでに七十歳の高齢であるが、彼等があまり若く言つたので、衆は皆笑つた。次に日本人は彼等をして夫婦のやうに接吻させ、貴婦人達は笑ひながらそれを見て、頗る滿足したものゝやうであつたともいふ。更に日本人は歐羅巴の方で一般に行はるゝ敬禮——目下に對し、目上に對し、貴婦人に對し、諸侯に對し、又王に對するそれらの作法の類をやつて見せよと言ひ、續いてケンペルは殊に歌を歌ふやう所望されてそのもとめに應じた。やがて道化は終つた。彼等は上衣を着、一人づゝ簾の前へ行つて、彼等の王公に對すると同樣の禮でもつて別れを告げた。その日、彼等が殿中で喜劇を行つたのは二時間の餘であつたといふ。

江戸を去る前、フウテンハイムの一行は暇乞ひとして將軍の居城を訪ねた。その時、百人番で三十分も待たせられた後で、使節は老中の前に呼び出され、老中は屬僚に言ひ付けて例によつて一場の訓示を朗讀させた。訓示は主として彼等が支那人や琉球人の船に妨害を加へてはならないこと、和蘭船にはホルトガル人及び切支丹宗僧侶は一人たりとも載せて來てはならないこと、これらの條件を奉じて間違ひない限りは商法自由たるべしといふのであつた。朗讀が終ると、使節の前には三つの三寶が置かれ、その三寶の一つ〳〵には十重ねづゝの素袍が載せてあつた。將軍から使節への贈り物だ。使節はうや〳〵しくそれを受け、五つ所紋のついた藍色な禮服の一つを頭の上に高くあげて深く謝意を表した。それから一同別室へ導かれ、將軍の命で晝飯を下し置かれるとの挨拶があつて、日本風の小さな膳が各人の前に持ち運ばれた。その食事は彼等和蘭人に、この强大な君主の莊嚴と驕奢とにふさはしからぬほどの粗食とも思はれたといふ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com